

<http://grimreaper.is-mine.net/>

# マナリアメマジック MACHINERY X MAGIC

著：射月アキラ

## Code1 : KOLGA

雲の上を、一匹のキンギョが泳いでいた。

パールシルバーの塗装を施された金属製の魚は、流線型の本体と複雑な曲線を描きだすヒレを持っている。本体とヒレはそれぞれ独立した別の部品で作られ、磁力によって接触することなく繋がっていた。特に華美な印象をあたえる尾ビレ部分は、十を超えるパーツで構成されている。

通常、水棲生物をモデルにしているシリーズ・エーギルの機体のヒレは、金属の骨格に強化繊維の被膜を張って風をとらえる。これは機体に搭載された反重力機能が不完全であるためで、機体の軽量化と浮力の確保が必要だからだ。

つまり、被膜による浮力確保をしていないキンギョ型の機体は、完全な反重力機能を搭載したプロトタイプ——シリーズ・エーギルの中でも型番を持たない特別製である。

Series Aegir - Project9 コールガ KOLGA

華美な見た目に反して、名は「押し寄せる大波」の意味を持つ。無駄が多いようにも見えるが、その実、コールガは闘争に特化した『波の乙女計画』に属する九機に含まれている。

元より成功品として名を上げてきたシリーズ・エーギルの中でも、『波の乙女計画』は特に「最強」という言葉と共に語られることが多い。

——にも関わらず、コールガのコックピットに収まるパイロットの表情は優れなかった。

パイロットは、二十代前半と思しき青年である。軍人らしく短く刈り込んだ髪はダークブロンド。眉根を寄せて顔をしかめてはいるものの、瞳は爽やかな夏空を思わせる空色だった。

ブラッド・ベイリー。

それが、コールガを操る青年飛行士の名だ。

最新鋭の——裏を返せば実験的な機体に、彼のような年若い人間が搭乗することはかなり珍しいはずなのだが、ブラッドは気負いや不安の感情を見せていない。通常、試験機に乗るテスト・パイロットは、前線を退いたベテランが務めるものであるにも関わらず。

しかし、ブラッドは緊張の表情ならば露わにしていた。

原因は、視線の先にあるモニタと、コックピットに流れた電子音声から受け

取った情報である。

周囲に友軍反応はありません―

援護可能機を検索 \*\*\*完了―

到着までの所要時間はおよそ一時間です―

音声の終了と同時に、モニタの隅にポップアップしたウインドウで六〇分のカウントダウンが始まる。

その上のカウンターは、敵機反応――三二七を示して止まっており、すぐ隣には敵機との距離が表示されている。こちらは止まることなく減少を続けていて、それに伴ってモニタ上のノイズじみた黒点が大きくなっていった。

接触までの時間は八分。

もちろん、射程範囲に入るのはそれよりも早い。

友軍から離れた場所で、敵の大部隊に遭遇する――特に言葉を尽くす必要もなく、単純明快に危険な状況だった。

「……運、ないなあ。俺」

ため息まじりに吐き出された声は、それでもまっすぐにマイクまで届いたらしい。

電子音声と入れ替わるように、通信の声が入る。

『コールガに搭乗した際、注意事項を伝えられたはずです。単独行動中は特に注意せよ、と』

抑揚のない、若い女の声だった。生きている人間が発しているにも関わらず、機械音声からイントネーションの違和を排除した程度にしか聞こえない平坦な口調を維持したまま、オペレーターは語る。

『戦闘の許可が下りました。生還のため、最大限の努力をするようにとの通知です』

「ずいぶん早いな。さっきだろ、報告したの」

『それだけ貴重だということですよ。コールガも、貴方も』

「そこは貴重じゃなくて大切って言ってほしかったな」

冗談のまじったぼやきは黙殺。

『戦闘を開始してください』

冷やかに告げたオペレーターに対し、ブラッドはもう一度ため息をついて応答。足の間から伸びる操縦桿を握む。

しばし目を閉じ、その後開かれた瞳に冗談や笑みの色はない。「了解。戦闘開始」

通達を繰り返す。と同時に、ブラッドの声にコールガのAIが応えた。

コマンドを確認――

待機モードを解除――

これより戦闘を開始します――

電子音声が告げると同時、コックピット内部は一変した。

モニタに表示されるのは、コールガの本体から見える全方向映像。一気に青く、明るくなった視界に目を細め、状況を再確認。敵機残数と距離関係は小さくまとめられ、前方には主砲の照準となる薄い円と十字が――しかし、撃つにはまだ早い。

コールガが戦闘状態に入ったことを確認すると、ブラッドは右足を踏み込んで加速。操縦桿を引いて一気に上昇する。

黒点はモニタ前方から消えた。しかし、相対距離を見てみると、距離の開き方はコールガの移動速度に対してあまりに遅すぎる。

ちらりと後ろを振り返ってみれば、数個の黒点が軌道を変え、エンジンブーストの閃光を散らしながらこちらへ近づいてくるのが見えた。

敵機は旧型。であるが、速度よりも火力を重視されたコールガが逃げ切れる道理はない。

なにせ相手は、三〇〇を越える友軍の中から、特に追走が得意な機体とパイロットを選ぶことができるのだから。

逃げ切ることが不可能。であれば、撃破するしかない。

三二七機、全てを。

そして、敵軍を全滅させることならば――コールガには可能だった。

ブラッドの操作に従い、コールガは尾を振りながら反転。真下を向いて、追走する敵機に顔を向ける。

先行して追撃をしかけているのは六機。その遥か下方で、ひとかたまりになっていた三〇〇の黒点が数個のグループに分かれてコールガの包围を始めていた。

「コード・マジック、発動準備開始……！」  
頬を伝う冷や汗を無視して、ブラッドはコールガにコマンドを入力する。  
瞬間、モニタ上に半透明のウィンドウが連続してポップアップ。インジケータバーとパーセンテージが表示され、準備終了までのカウントダウンが開始された。

コマンドを確認―

これよりコード・マジックの発動シークエンスを開始します―

遅れて、AIが返答。

インジケータバーが青く染まりはじめ、パーセンテージは徐々にその数を増やしていく。

ブラッドは視界の端でそれらを確認し、すでに形が分かるほどに接近していた先行部隊の一機をロック・オン。

操縦桿のトリガーを引く。

コールガの本体、額部分に埋め込まれた主砲が火を噴いた。

モニタの中で、三角形に近い漆黒の亜音速機が熱線に貫かれる。

鋼鉄すら即座に融解させる高温に、被弾した敵機は大破。それを皮切りに、先行部隊の残り五機が分散して攻撃態勢に入った。

多方向から目に飛びこんでくるマズル・フラッシュに、ブラッドはたまたまらず操縦桿を倒す。

熱線が左右を通り過ぎていく。ヒレと本体が完全に分離しているコールガは、本体にさえ熱線が当たらなければ戦闘不能に陥ることはない。反重力機構はコックピットのある本体にも搭載されているし、もともとヒレは飛行するための役割を担っていないからだ。

が、しかし。

形勢逆転に必要な不可欠なコード・マジックを正常に発動させるためには、たとえヒレの一部分であろうと、たとえそれが飛行に必要な部位であろうと、一撃の被弾も許されない。

「あと……一分かよ……っ！」

モニタの表示に、青年が呻く。

先行部隊の五機。加えて、後続する本隊が次々と熱線を撃ちだし、視界が赤く染まるほどの弾幕がコールガに襲いかかる。

一対三〇〇の戦いとは思えないほど、余裕も容赦もない猛攻。

それは、シリーズ・エーギル、ひいては『波の乙女計画』に対して敵軍が抱いている恐怖心を如実に表しているとも言えた。

死と隣接した、息も詰まる状況。判断力はそのまま、時間だけが引き延ばされる。迫りくる漆黒の機体と赤い熱線を前にして、瞬間の迷いが生じ――

『右へ』

飛びこんできた声に従い、ブラッドは咄嗟に操縦桿を右に倒した。

直後、後方から放たれた追尾ミサイルが前方の熱線に触れて爆発。カメラを通して目撃できない閃光に思わず目を細めるが、視界を閉ざすことはしない。そのような愚行は犯さない。

代わりに、

「サンクス、アビゲイル！」

短く返答してから、コールガの姿勢を立て直した。

本体とヒレが磁力で繋がっているという性質上、部位によって移動速度は微妙に変わってくる。動きの遅延はある程度AIが制御してくれるものの、三〇〇機以上の戦闘機による弾幕が張られていけば制御しきれない部分が被弾の原因となる。

前述の通り、コールガは本体が被弾しなければ飛行能力を失うことがない。代わりに、ヒレの一部が破損しただけでも形勢逆転の一手を失う。

そして、現状。その一手がなければ、ブラッドはこの状況を抜け出すことができない。

三〇〇の軍勢に囲まれた中から抜け出すことができなければ、そこに待っているのは――

――今度こそ、死ぬかもしれない。

ブラッドが内心で呟いた瞬間、半透明のウィンドウの中でパーセンテージが一〇〇を叩きだした。

続けて、電子音声のアナウンスが。

コード・マジックの発動シークエンスが完了しました――

エネルギーのチャージを行ってください――

「——っ!!」

電子音声に応え、ブラッドはリスクも構わず右手のみの操縦で弾幕をかいくぐり、シートわきのレバーへと左手を伸ばす。

形勢逆転の一手——コード・マジックは、『波の乙女計画』で開発された九機のうち八機にしか搭載されていない、研究段階の兵装だ。

超科学的なエネルギーを使用して、初めて機能するコード・マジック。それを発動させるには、パイロット自身が超科学エネルギー——魔力を有していないければならない。

一度死の淵に触れて生還することで得られる、死後の世界に満ちるエネルギーを。

「受け取れよ！ コールガ！」

ブラッドは左手に力を入れ、吠える。

モニタに表示されていたインジケータバーは、魔力を受け取ったことよって瞬時に青く染まる。その上に重なるようにして、「COMPLETE」の文字が浮かびあがった。

即座にブラッドがレバーを引くと、コールガの外装に赤いラインが走る。

左右の胸ビレ、背ビレ、尾ビレ。

それらを構築していたパーツが、本体を中心に広がって円形を模り——一つの幾何学的模様、魔法陣を作り出す。

動きを止める敵軍勢に対し、ブラッドは口元だけでにやりと笑みを浮かべる。展開された魔法陣の前には、すでにいくつもの火球が発生していた。

——コールガの名の意味は、「押し寄せる大波」。

コンセプトは、不可避の弾幕。

発動条件 COMPLETE

コード・マジックを発動

これより殲滅を開始します

電子音声の宣告と同時、コールガ一機から放たれた幾百もの熱線が、漆黒の

<http://grimreaper.is-mine.net/>

軍勢へと降りそそいだ。

## Code2 : HIMINGLAEVA

「——まったく、テストフライトだったのに、散々だったな」

『遠方に敵軍隊がいることは、あらかじめ通知していました。注意力が散漫だったのでは』

「それは……はは、言われたら返す言葉がない」

『笑いごとではありません。危機的状況だったということを理解しているんですか？』

コールガ内部。

戦闘機動時から一転して、コックピットには和やかな空気が満ちていた。

……とは言うものの、もともと一人が搭乗するようにしか作られていないコックピットには、もちろんコールガのパイロットであるブラッドしか収まっていない。

ブラッドの会話相手は、管制室にいる彼の専属オペレーター、アビゲイル・ホプキンズである。口調と同様、堅苦しい性格をしていそうだと思われているアビゲイルは、その実、重大な軍規違反さえなければ柔軟な対応をする人間だ。でなければ、回線を使用した私語など自分にも他人にも許すはずがない。

『見れば分かるかと思いますが、貴方が落とした三三七機は全てラ・モールです。帝国軍の亜音速戦闘機。自分で言っていたでしょう？ コード・マジックの発動に時間のかかるコールガにとって、兵装をドッグ・ファイト用にカスタマイズしたラ・モールは天敵だ、と』

「……そんなことも言ったなあ、確かに」

片手で操縦桿を固定しながら、ブラッドは頬をかいた。視線は何もない中空へ。

通信では音声しか送受信できないはずなのだが——数秒の沈黙ののち。

『覚えてなかったんですね』

「い、いやいや、そんなことはないぜ？ うん。あの弾幕ぶち込めるようになれば敵なしだもんな？」

どうにかごまかそうとしたブラッドは、自分でも理解できるほどにうろたえていた。その上、言ったあとによくよく考えてみれば、発言的には馬鹿丸出しの内容だった。

アビゲイルのため息が耳に痛い。

『そう思うんでしたら、戦闘許可が下りた瞬間にコード・マジックの発動準備をしていけば無駄な戦闘は——』

「アビゲイル……」

『なんです？』

「お前ってたまにすごく頭いいよな」

ブラッドとしては本心を語ったつもりだったが、返答は素っ気ない。

『貴方は一応、優秀なパイロットとしてコールガを与えられているんです。自信を持ってください』

「パイロットとして状況分析力と判断力が欠けていてどうもすみませんでした」

かつて様々な機体を乗りこなしてきたブラッドとしては、「自信を持って」という言葉自体がプライドを打ち崩す一言だった。うなだれてみると、うっすら涙が出てきそうですらある。

しかし、そんなことをしている場合ではない。視線をあげてみれば、前面モニタにはブラッドの帰還先である母艦が映し出されていた。

次いで、通信越しのアビゲイルの声。

『着艦準備を』

「——了解」

ブラッドの声が硬い。それは緊張のためではなく、興奮を隠すためのものだった。

前面モニタには、青い空を背景に浮かぶ、白いクジラが映っていた。

雲に擬態できるよう、表面には艶消しの塗料が使われているが、近づけばクジラが機械製であることは容易に確認できる。金属板を張り合わせた痕跡——わずかな境界線やボルトが作り出す陰影が、機体のあちこちにできている。

比較対象がないために巨大さを測ることは難しいが、これからコールガが着艦する母艦がそのクジラであることを考えれば、それだけで十分とも言えた。

白いクジラは、「飛行可能な航空母艦」である。

この機体は、飛び続けること——つまりは着陸しないことを前提として開発されている。もちろん従来の燃料や技術では実現できるはずもなく、コールガ同様に『波の乙女計画』の一環として作られたものだ。

着陸の必要がなく、迅速な移動が可能で、多数の機体と人員を収容可能。

となれば、飛ぶ空母というよりは、飛ぶ要塞と言った方が近いのかもしれない。機密事項の多い、最先端の技術を凝縮した『波の乙女計画』は、このクジ

ラを中心にして進んでいる。

Series Aegir - Project9 ヒミングレーヴァ  
HIMINGLAEVA

『波の乙女計画』で使われている拠点にして、同計画内で最初に作られた機体だ。

『九番ゲート、開きます』

アビゲイルからの通信には応えず、ブラッドはヒミングレーヴァの動きを注視する。

コールガを始め、『波の乙女計画』で作られた機体は、作戦行動中でなければヒミングレーヴァ内部——クジラとして考えると口腔に位置する格納庫に収まることになる。そのため、出入り口のゲートはヒミングレーヴァの口。コックピットの前面モニタには、大口を開けた鋼鉄製のクジラが映し出されることになる。

自身の体がぶるりと震えるのを、ブラッドは感じていた。

喰われる——という動物的な恐怖心も、その中には当然あるのだろう。計器類で埋め尽くされ、鉄の色を残している口内を見て動物らしさは感じないが、呑み込まれることに変わりはない。

だがしかし、なによりも——コールガのような有人機を、八機も格納してなお余りあるスペースを残したヒミングレーヴァが当たり前のように空を飛んでいることに、ひたすら驚嘆して興奮する。たとえ、現在のブラッドにとって家に等しい場所であったとしても。

「……ほんとに、ハンパないデカさだよなあ……」

『集中してください』

独り言に思わぬ返答があって、ブラッドは思考を切り替えてコールガの観測データを見直した。モニタ下部に表示された風向きと風速を考え、静止状態を維持するヒミングレーヴァに潜りこむ。

照明はあるものの、空と比べれば室内の暗さは際立つ。とはいえ内壁と接触でもしてみればコールガとヒミングレーヴァ両方に影響を与えかねない。

念のため、AIに命じてヒレ部分を本体に近づける。モニタを注視すると、口内でさらに細分化された八つあるゲートの右端で緑色のライトが点滅していた。

注意を促す光点を目印に、ブラッドはコールガを操ってゲートを通過。専用の格納庫にコールガの本体を着底させる。ヒレはコールガの姿——キンギョ型を維持することもなく、格子状に組まれたメカニック用の足場の間にそれぞれ

収まった。

次いで、コールガの機能が停止。前面モニタが消えてコックピット内部の照明が点灯する。

『コールガの帰投を確認しました。これにて作戦行動を終了します。お疲れ様でした』

アビゲイルの声を聞いて、ブラッドはようやく息をつく。飛ぶこと自体は苦ではないし、むしろ楽しんでる方なのだが、戦闘機どころか飛行機として異質すぎる形状のコールガは扱いひとつひとつに神経を使う。気が休まらない。

シャワーでも浴びるか、それとも軽く腹に入れるか、と頭を巡らせながらコックピット上部を開放。外へ一歩踏み出そうとして、

『あ——少し待ってください』

「うん？」

コックピットの内部から通信の声。近場の手すりに手をかけて、アビゲイルの言葉が続くのを待つ。

すぐに返答があると思われたが、わずかに間が生じる。ブラッドのことを呼んだわけではないのだろうか、と疑いかけた頃、ようやく言葉の続きが述べられた。

『コールガパイロット、ブラッド・ベイリーに通達します。すぐに司令室に向かってください』

「へ？ 俺なんかした？」

『上官に呼ばれることと違反行為をすることをイコールで結ばないでください。任務の話に決まっています。……それと』

「おう」

『降りるときはきちんと通信を切ってください』

\*

ヒミングレーヴァの中を歩いていると、空を飛んでいるという事実を忘れてしまいたいことがある。

完全に反重力機構に依存した飛行をしているため、エンジン音がないというのが一つ。また、静止中であれ、移動中であれ、揺れが少ないというのが大き

い。実際に歩いていても、体にわずかな圧を感じる以外は地上と変わりがなかった。

大きな船に乗ると揺れをあまり感じないのと同じだろうか、と思いつながら、ブラッドは狭い廊下を進む。多くの戦艦や航空母艦がスペースの節約に力を注いでいるのと同じように、ヒミングレーヴァも可能な限り狭い空間で最大限の効率を実現する設計になっていた。

記憶を頼りに歩み、数人の乗組員とすれ違いながら、やっとこさ司令室に辿り着く。帰投からの経過時間は、体感にしておよそ五分。途中には道を間違えるというハプニングが含まれる。

——遅刻扱い、になるのか？

厳密に時間の指定があったわけではないのだが、ブラッドの意識にはわずかな不安がある。

『波の乙女計画』の創始者であり、司令官である男と面識がないわけではないのだが、その信条や思想に関しては詳しくないのが実状だった。そういったものを表に出さない……といえれば聞こえが悪いのだが、それは同時に信条や思想を押しつけないという意味でもある。

軍人らしいと言えば軍人らしいし、軍人らしくないと言えば軍人らしくない。そんな印象を抱いているが、今それを気にして立ち止まるわけにはいかない。ブラッドは二、三度首を振って扉に向き直った。コールガを降りてから羽織った空色の軍服を整え、一息ついてから二回ノック。

答えは即座に返ってくる。

「どうぞ」

「……失礼します」

鉄製の扉を開けると、空母内にしてはスペースに余裕のある室内を見渡すことができた。

部屋の中央に、天井と床に貼りついた正方形のモニタのような機材がある。上下から極細の光を照射し、ホログラムを作り出すものではあるはずなのだが、ブラッドはいまだにその真価を見たことがない。

奥には、どうやって運び込まれたのか、扉より幅広なデスクが。その向こう側にある黒革張りの椅子に、白髪と深い青の瞳を持つ壮年の男が腰かけている。肩の高さでひとくくりにした髪や、ゆったりとした座り方などを見るに、軍人というよりも学者に近い印象を受ける。入室を促す言葉にも、将官特有の堅苦しきは全くなかった。

軍人らしからぬ軍人。しかしその眼光だけは、相手の一挙手一投足を見逃さない戦うものの目をしている。だからこそ、学者然とした容姿であっても軍服を着ていることに違和感がないのかもしれない。

クレイグ・アークライト。

『波の乙女計画』によって自軍に救いをもたらしたが、それでもヒミングレ―ヴァに乗り込んで最前線に立ち続ける男。

「テストフライト直後になって申し訳ない。時間的なゆとりを持たせようとしたんだが——どうやらハプニングがあったらしくてね」

深い青の瞳が目を細める。ブラッドは思わず顎を引いた。

口調にすぐわない鋭い視線は、たとえ本人に威圧の意志がなくても他人をひるませる。

「被弾回数は？」

「ゼロです。……コード・マジック発動時にエラーが発生しなかったので」

「素晴らしい」

ブラッドからどんな返答がくるのか予測していたかのような、中身の無い称賛だった。

どう返すものか迷ったブラッドは、クレイグから視線を反らして、ようやく部屋にもう一人軍人がいることに気がついた。

壁に背をつけて軽く俯いているため、その表情をうかがい知ることはできない。掘りの浅い顔立ちや色素が濃い割に柔らかい毛質を見るに、東方の国の血を引いているとは思われる……のだが、ブラッド自身、その判断に確信を持っているわけではない。

現在、大陸のほとんどは帝国によって支配されている。コールガのテストフライト中、攻撃を仕掛けてきた黒の亜音速機ラ・モールも、帝国軍によって開発された戦闘機だ。

圧倒的国力をもって、世界を支配し続けてきた帝国。それに対する「反撃の手段」を手に入れたのが、ブラッドの属している公国だ。

反重力機能を搭載した、シリーズ・エーギル。

魔力を使用して形勢逆転を可能にする、『波の乙女計画』。

帝国に対する抵抗手段を持っている公国は、軍事国家の支配に抗いたい人々にとつての希望でもあった。武力はなくとも、抵抗の意志を持ち続けている人間ならばどこにもいる。

故に、帝国に追われている反逆者や、帝国支配を抜け出そうとした難民が、

公国に流れ着くことは珍しくない。しかし、それも近隣からの流入であって、大陸西端に位置する公国に大陸東部——東方と呼ばれる地域の人間が辿り着ける可能性は極めて低い。伴って、公国人が東方出身者を見る機会も少ない。

そうなってしまうのは、移動距離が長く、亡命にかかる所要時間も長くなることが理由の一つに上げられるが——もう一つ。どうしても避けられない問題が、容姿の違いである。

一目で「余所者」と知られてしまう姿をしていれば、亡命未遂者であると疑われてマークされる可能性は自然と高くなる。一度世界の覇者となった帝国は特に支配欲が強く、公国のことも「反乱軍」と称して独立を認めていないほどだ。亡命者に対する取り締まりはもちろん厳しい。

一体どれほどの危機を潜りぬけてきたのか。東方出身と思しき男の双眸に輝きはしない。

異国情緒と言うべきか、同じ軍服をまとっていても隠しきれない異質さを醸し出す男は、どこか別の世界の人間であるような雰囲気をただよわせている。

東方の人間に対して偏見を持ってはいないと自覚しているつもりなのだが、ブラッドは男から目を反らせずにいた。「珍しいもの」として見てしまっているのだろうか。わずかな自己嫌悪が芽生えようとして、その直後に背中に氷が叩き込まれた。

無論、物理的ではない。東方風の男がブラッドへ視線を向けた——それだけで、ブラッドの背中に寒気が駆け抜けていったのだ。

インクで塗りつぶされたような黒瞳。感情のうかがえない視線。その中には数多くの負の感情が込められているようにも感じるが、寒気の原因はそれだけではない。むしろ、本質は他にある。

男の顔の右側をおおう、火傷の痕だ。軍服の襟の下、首筋までのびている火傷痕は、火事か爆発にでも巻き込まれたのではないかと思わせるほどの大きさだった。黒々とした瞳とあいまって、火傷は男の雰囲気を一層不気味なものにしている。

ブラッドが目を見開いている間に、男は素っ気なく視線を反らしてしまった。ブラッドの反応を不快に感じた、というよりは、最初から興味など持っていない、という印象。現に、男の黒瞳はなんの感情も映さずに虚空へ向いている。

「——それでは、本題に入ろうか」

両者の視線が交わったのを確認したのか、クレイグは椅子の背もたれに寄り

かかりながら話を切り出した。

自然とブラッドの背筋が伸びる。思考を切り替える。

「ブローズグハッダパイロット、モン・チャン。コールガパイロット、ブラッド・ベイリー。以上二名には明日、帝国の戦艦・レヴィアタンの撃沈任務に就いてもらう」

「レヴィアタン……って、帝国のジョーカーとか言われてた、あの？」

「そのレヴィアタンで間違いない」

ブラッドの問いに答え、クレイグはデスクに埋め込まれたパネルを操作する。呼び出されたデータは司令室中央のホログラム投影機で展開され、極細の光が戦艦の像を作り出した。

鉛色が剥き出しのままの姿は、水棲生物をモデルとしたシリーズ・エーギルよりもよほど兵器らしい。船首上部は水を切るために鋭く、水中に沈む下部はソナーを内蔵した球状の突起が突き出ている。

水面上の船体上部には、中央から前に伸びる二本の主砲。その下には一回り小さい副砲が備えつけられていて、左右を囲むように対空ミサイルの発射ポッドが並んでいる。

超弩級戦艦にカテゴリされるレヴィアタンの主砲は五十二口径。他、全長や幅といった数値で示されるデータは投影されたウインドウに収まっているが、文字通りミニチュアサイズと化した戦艦を見ても実感が湧かない。

「全長二二〇メートル、幅三二メートル……などと言うよりは、こうした方が分かりやすいかな」

ブラッドの心中を察したように、クレイグが言う。同時、端末の操作に従って投影機がもう一つの像を結んだ。

漆黒の亜音速機——ラ・モール。公国空軍に所属していれば一度は見ると思われる、最高の汎用性を有する帝国機が、レヴィアタンの隣に並ぶ。

たったそれだけで、『全長二二〇メートル』という数値にリアリティが増した。コックピットから見つめ続け、追い続けてきた敵機の大きさは、下手をすると頻繁に変化する自機よりも分かりやすい。

「いい標的に見えるか？」

「……当てやすそうではありませんね」

しかし、二二〇メートルの巨体に対し、ブラッドが感じたのは畏怖ではない。言葉を選んではいるものの、その口調に恐怖の感情は含まれていない。

——レヴィアタンは、帝国のジョーカーだった。

圧倒的な火力と、巨軀の割に高い速力。空の上にも海の中にも、沿岸部であれば陸にも対応できる万能性は、かつて様々な戦場で帝国軍に勝利をもたらしてきた。たとえ、帝国が不利な状況に陥っていたとしても。

「かつては戦場を支配していた戦艦だ。大艦巨砲主義の産物といえば古臭く感じるが、優秀な護衛艦と相応以上の速力を持っている。しかし、もう切り札にはなりえない」

クレイグの視線は鋭くレヴィアタンを射る。獲物を狙う獣のような目をしながら、その表情はどこまでも柔らかい。

ジョーカー。切り札。「出せば勝ち」を実現するモノ。

時代が変わり、科学技術が進化を遂げれば、有効な兵器も変化するのは当然のことだ。昨日までは脅威だった敵兵器に弱点が見つかり、たった一晩で認識が変わることだってある。最強無比と謳われていた機体の次世代機が次々と現れることだって、ありえないことではない。

「かつて多くの人間が言ったものだ。『レヴィアタンが空を飛べば、それは最高の兵器になる』と。……冗談まじりにはあったがね」

クレイグの言葉を借りて言えば——公国は、レヴィアタンを飛ばすことに成功した。

もちろん、「戦艦をそのまま空に浮かべる」という意味ではなく、レヴィアタン並みの超火力を戦闘機に搭載する形で。

ブラッドの口元に自然と笑みが浮かぶ。

コルガ。公国の誇る機体の一つ。その火力と機動力ならば、ついさっき発揮したばかりだった。レヴィアタンの火力を実際に見たことがあるわけではないが——コルガを「飛ぶレヴィアタン」と称しても、決して過言ではないだろう。

「さっさと引っ込んでくださいヨ」

と、それまで沈黙を保ち続けていた東方風の男が、唐突に声を発した。発音やイントネーションに違和感が残っているものの、口調にはためらいなどの感情が微塵も含まれていない。

それは彼の視線にも表れていて、黒塗りの瞳はまっすぐにクレイグへ向けられていた。

「デカイ顔してるジョーカーモドキをさっさと爆破してこい、って。それで済むじゃねえですか」

荒々しさのない、静かな声音。だがブラッドは、その根底にどす黒い衝動が

潜んでいるように感じた。

隠して、押しこめて、凝縮された「なにかをぶち壊したい」という感情。その片鱗が姿を現している——と。

対するクレイグはといえば、ただうつすらと苦笑を浮かべただけだった。

「君は容赦がないな」

「あつてどうするんです？ そんなもの、望んじやいないでしょウ？」

「その通りだ」

同意したのちに立ちあがり、告げる。

「改めて繰り返す。今回の任務は帝国の元ジョーカー、戦艦レヴィアタンの撃沈が目的だ。ブローズグハツダの高火力によって同戦艦を沈める。今回が作戦初参加となるコールガには、その護衛を務めてもらう。詳しい状況は追って伝える」

クレイグ・アークライトの口調は揺るがない。

平坦で冷静で、ひとつ間違えれば事務的にも聞こえてくる指令ではあるものの、その声は重い。へたに張りあげられた声よりも、聞くものに緊張感を与えてくる。

誰よりも軍人らしくない。同時に、誰よりも軍人らしい。

その性質は、独立心も愛国心も特に抱いていないブラッドからすれば、この上なくありがたいものだった。自分の信条と関わりのない部分で盛り上げられてしまった場合、モチベーションは反比例的に下がっていく。

個人的な信条や感情など含めず、坦々と標的だけを示すクレイグの「やり方」は——おそらく『波の乙女計画』に適応しているのだろう。ただ一つ、「死に瀕したことがある」以外に共通点のない、経歴も出身も性格もバラバラなテストパイロットたちをまとめるためには、最適な方法なのかもしれない。

上に立つもの、という表現がぴったり当てはまる。士官学校を出ていない、叩き上げの司令官に見られる特有のカリスマ性に近いものがある。

人の下につくことも、人の上に立つことも、正しく理解している。そう確信できるのは、クレイグ自身が魔力を有している——死に瀕したことがある——という点が大きいだろう。

『波の乙女計画』で初めに作成された飛行戦艦・ヒミングレーヴァに動力を提供しているのは、他でもないクレイグだ。

「ぜひ、君たちが示してきてくれ——我々が新たなるジョーカーである、と」  
新進気鋭の司令官は不遜に言った。

<http://grimreaper.is-mine.net/>

ヒミングレーヴァの名の意味は「天に輝く者」。  
「戦場支配」のコンセプトを持つ、上に立つもののための機体である。

## Code3 : LEVIATHAN

コールガ起動――

反重力フィールドを展開――

通常モードにて飛行を開始します――

電子音声が定型文を読み上げてから一拍おいて、ブラッドの体は軽くコックピットに押し付けられた。

コールガに限らず、反重力機能を搭載しているシリーズ・エーギルの離陸は、従来の飛行機やヘリコプターと比べてずっと滑らかだ。飛行機のようなジェットエンジンも、ヘリコプターのようなローターも使わない飛行は、乗り手や部品のストレスにもなりうる振動や騒音を大きくカットする。

その代償として、反重力機能が不調をきたせば墜落するというリスクを背負わなければならないのだが、そもそも『波の乙女計画』はプロトタイプである。ブラッド自身、安定性など最初から求めている。本来ならば、いきなり実戦投入などせずに自国内でテストフライトを重ねるべき機体なのだから。

『今回はブローズグハッダと共に行動することになります。コールガの役割は護衛ですので、先行して周囲を警戒してください』

「了解」

オペレーター・アビゲイルの平坦な指示が飛ぶ。

返答したのち、ブラッドは操縦桿を操って前進。出撃用のスペースに移動していたコールガは、前方に大きく開いたゲートからヒミングレーヴァの外へ出る。

モニタに蒼穹が映し出された。眼下には白い雲の帯が。頭上には昇っている途中の太陽が輝いている。

視界を阻むものは何もない。雲の上はいっただって快晴だ。

と、周囲に目を向けていると、無線機からわずかなノイズが。続けて、特徴的なイントネーションで素っ気ない言葉がかけられる。

『――あー、こちら、モン・チャン。音声は良好か？』

別機体の接近に反応して、コックピット内の右側面モニタが起動。並走するブローズグハッダを映す。

どうやらブローズグハツダはハリセンボン型のようにだった。といっても、「ハリセンボン」と聞いてすぐに思い浮かぶような体を膨らませた状態ではなく、あまりなじみのない「しぼんだ」姿で飛行している。小刻みに胸ビレを動かす姿からは、顔に火傷痕のある異国人パイロットを想起しにくい。

とまどいを隠してブラッドは返答。

「こちら、ブラッド・ベイリー。感度良好。……あー、モン、でいいのか？」

『そっちはファミリーネームだ。チャンでいい』

「オーケー。俺はブラッドでいい。今回はよろしく頼む」

『……了解。いつでも出発してくレ』

会話終了。同時に、チャンの操作で無線通信は切断された。

無駄な雑談は好まないのかもしれない、と予想しながら、ブラッドはコールガをオートパイロットモードに移行する。指示された座標を口頭で入力すると、コールガはゆっくりと加速し、前進。

側面モニタが消え、真後ろの背面モニタが点灯。追従するブローズグハツダと、雲の帯にもぐりこんでいくヒミングレーヴァーが映る。

しばらくは景色に変化がない。よほど運が悪くなければ、状況にも変化は起きないだろう。敵機発見が遅れなければ、異常事態も大抵は回避できる。

ブラッドの口が開き、

『暇だ、とでも言うつもりですか？』

冷やかなアビゲイルの言葉に閉口しかける。

すんでのところで踏みとどまり、ブラッドはコックピット内を見まわした。

「……なあ、このコックピットってカメラついてんのか？俺のこと見てるだろ」

『安心してください。そんなものではありません。……というか、今まさに言おうとしてたんですか？緊張感というものはないんですか？』

「俺の緊張感とか集中力はスタミナねえの。短期集中型なの。本番に備えてんの」

『便利な言い訳ですね』

単刀直入な切り返しに、今度こそ閉口。口喧嘩というか、口論というか、他人を言いくるめることが得意なオペレーターに、ブラッドが勝てる道理はないのだが、いつも同じパターンだなどと思わないこともない。

ふてくされつつ、ブラッドはコールガに指示してリーダーからの情報を表示する。次いで、ステルス性の高いラ・モールに対応するためにモニタを全面表

示。

シートにもたれかかりながらも視線を走らせる。——のだが、緊張感のかけらもない暇つぶしのような索敵だった。

その暇つぶしも、ブラッドにとっては苦痛でしかない。視界に入るのは蒼穹と白雲の帯。それらのことは嫌いではないのだが、見ている内に「飛びたい」という欲求がふつふつとわきあがってくる。

オートパイロットモードのような無粋な方法ではなく、自分の意志で操って、自由に飛びたくなってくるのだ。

——意識を反らそう。

ブラッドの思考がその結論に至るまでに、さほど時間はかからなかった。

「なあ、アビゲイル」

『なんですか？』

「今回の作戦、参加するのは二機だけか？ レヴィアタン相手に」

『火力として計算されているのは二機ですが、もう一機、先行してレヴィアタンに接近している機体があります』

一度アビゲイルの言葉が切れ、キーボードの打鍵音が聞こえてくる。

『ステルス特化の機体、ドゥーヴァ。今回、敵座標が細かく指定されたのは、ドゥーヴァがレヴィアタンに貼りついていていいるからです』

「へえ……もうそいつは撤退してんのか？」

『いえ。後続機が到着するまで貼りつくか、あるいは到着後も陽動役の任につくことが多いです。今回は陽動役をするようですが——』

打鍵音が止まった。

わずかな沈黙ののち、アビゲイルが言葉を継ぐ。

『兵装は無音レールガンのみ。パイロットも元・民間人なので、それだけは意識しておいてください』

「……死にかけたことのある空軍兵つてのは、そんなに少ないもんなのかね……」

『死にかけたことがあるからといって、誰でも魔力を持てるわけではありませんからね。死の淵を長くさまよっていれば魔力の量も多くなりますし、逆に少ない人だってたくさんいるんです。仕方ありません』

坦々と述べるアビゲイルの口調はいつも通りだったが、わずかな違和感がブラッドの意識にひっかかった。

言っってはなんだが——アビゲイルにしては感情的すぎるとい印象を、ブラ

ツドは抱く。触れてはいけない部分に触れたのだろうか。もしそうだったとしても後の祭りではあるのだが。

ブラッドの視線に、素敵時とは比べ物にならないほどの緊張感が混じる。

「もしかして、アビゲイルもそういう境遇だったり……」

『私は軍学校の通信科卒です。死にかけたことはありません』

「……あ、そう」

しかし、的外れ。肩すかしを食らったかたちになったブラッドは、頬をかいて視線をさまよわせる。

つい最近もこんな状況になったような気がしたが、努めて無視。

追い打ちをかけるように——本人のその気はないだろうが——アビゲイルは容赦なく告げる。

『現場の状況を確認するのはいいんですが……予定通りにいけば、その現場にあと一〇分で到着します。無駄話は終わりにしますよ』

「りよーかい、周囲警戒を続けますよっと」

雲の上を飛んでいるコールルガから見える景色は、一〇分程度で変わるはずもない。

存在感を増すばかりのフラストレーションに、ブラッドはひそかにため息をついた。

\*

戦場は、すでに混沌としていた。

ブラッドはいまだその現場を直接見ていないが、戦場の異様さを知るにはリーダーからの情報だけで充分だった。

戦艦と思しき大きな反応は五つ。その内、一際大きいものが今回の標的であるレヴィアタンだろう。何かを警戒するように、隊列を組んだ状態で可能な限りの速さを保ち、一定の海域を動き回っているのが確認できる。

時折現れる六つめの反応が、『波の乙女計画』の隠密特化機体、ドゥーヴァのものと思われた。閃光のように現れては消える反応に、数秒遅れて対空ミサイルが放たれる。それから一〇秒もしない内に、見当違いの場所に六つめの反応が現れる。遅れて、ミサイル発射。一〇秒後、虚空から放たれた一撃が、レヴ

イアタンに命中。ミサイル発射。一〇秒後、何事もなかったかのように反応が現れ、消える――

百戦錬磨のはずのレヴィアタンとその護衛艦は、完全に翻弄されていた。翻弄されるしかないほどに、ドゥーヴァのステルスは完璧だった。

レーダー上に映らないことはもちろん、戦闘機対戦艦の割にはかなり近い距離で戦闘が展開されていることから、目視でも見つかりにくいものと思われる。

陽動を続けるドゥーヴァが被弾する様子はない。その大胆不敵な行動力は、パイロットが元・民間人であることをブラッドに忘れさせるほどだった。

モニタのレーダーマップに目を奪われながら、ブラッドは後続するブローズグハツダに無線を繋いだ。

「……こちらブラッド。これより戦闘空域に入る。チャン、ステルス機能を使っている友軍がいる。気をつけてくれ」

『ああ、俺は離れたところでコード・マジックの起動準備を行う。レヴィアタンと、うまくいけば護衛艦も巻き添えにハできるだろうガ……一回の戦闘で一発しかぶち込めない。ぶち込むときには後方への退避を頼みたい』

「オーケー。友軍機との接触を試みる」

無線は開いた状態のまま、ブラッドは続けてコールガにコマンド。

「戦闘を開始」

コマンドを確認――

オートパイロットモードを解除――

これより戦闘を開始します――

即座に電子音声が入り、モニタに大きく表示されていたレーダーマップが縮小される。

無線からは、同様に戦闘モードに移行し、さらにコード・マジックの発動準備を促すチャンのコマンドが漏れ聞こえてきた。

ハリセンボン型の機体を一瞥してから、ブラッドはコールガを加速させる。蓄積されたフラストレーションを解消するべく、最高速度へ突入。

ドゥーヴァに対応するので精一杯な敵勢力は、いまだこちらに気付いていないらしい。今の内にブローズグハツダから離れ、その存在をギリギリまで隠し

ておきたいところだ。

充分に近づいてから、ブラッドはコールガの鼻先を下に向け、一気に降下。雲を突き破りつつ、ドゥーヴァの無線にアクセスする。

「こちら、ブラッド・ベイリー。コールガパイロットだ」

言い終わり、返答がくるまでの間にコールガは雲を抜ける。白に包まれていたモニタは一面の深い青へ。空とは違う海の色を映し出す。

その中に浮かぶレヴィアタンと四隻の護衛艦は、白い波の線を引きながら移動を続けている。各戦艦の両舷に並ぶ対空ミサイルの射出口がこちらを向いているのを見とめ、ブラッドは操縦桿を傾けて軌道を変更。コールガはヒレをたなびかせて本体の位置を紛らわす。

『——こちら、ノーネーム』

硬い声で「名無し」を名乗る言葉が返ってきた。

気をとられかけるが、意識的に振り払う。最後まで追尾を続けたミサイルに対して反転して迎撃し、空中で爆発させる。

『ドゥーヴァパイロット。陽動は、いつまでやればいい？』

「今回の主砲であるブローズグハツダが準備を終えるまでだ。俺もできるだけ護衛艦を沈める。正面にこないよう気をつけてくれ」

『わかった。相手がそちらに気を取られてる間に、可能な限り敵の武装を破壊する』

無線の声が終わるか終わらないか、というタイミングで、下方で熱線のような弾道がレヴィアタンのミサイル・ポッドを貫いた。

発射地点と思しき場所には何も無い。ドゥーヴァは、影すら落とさない完璧なステルスを実現しているらしかった。放たれる空中ミサイルは、半分が虚空へ、半分がコールガに向けられる。

ミサイル迎撃の姿勢で止まっていたコールガを再発進させ、ブラッドはAIにコマンド。

「コード・マジック、発動準備開始！」

ポップアップするウィンドウには目もくれず、追いつがる追尾ミサイルから逃れようと加速する。

コマンドを確認——

これよりコード・マジックの発動シーケンスを開始します——

電子音声の返答を聞き流しながら、ブラッドは向かってくるミサイルを注視する。

数は七。追尾機能があるとはいえ、ひとつひとつを人間が操っているわけではないため、先日の三二七の弾幕と比べれば回避はたやすい。

ぐるり、と上下を反転させるようにして、きりもみ状に急下降。三発を振り切り、さらに急上昇して残りを海に沈める。

体にかかる圧力はめぐるましく変化していく。ぎしぎしと体が軋む無理な挙動を繰り返してはいるが、ブラッドにとって肉体的な苦痛などどうでもよかった。

——いや。どうでもいい、とは少し違う。人間が空を飛んでいる時点で多少の苦痛は味わってしかるべきなのだ、という思想を、ブラッドは持っていた。

当たり前のことではあるが、人間は自らの力だけで空を飛ぶことはできない。本来できないはずのことを、自然の摂理に逆らって行っている。それなりのリスクはあつてしかるべきで、その程度ならば受け入れることに文句はない。空を自由に飛べる、というリターンさえあれば。

「——は」

吐息にまぎれるような笑みが、ブラッドの喉の奥からこぼれた。

コールガに集中して放たれたミサイルの第三波も軽々と避け、視界の端でロード・マジック起動準備の完了を確認する。

直後、動きは回避から反撃へ。護衛艦の内の一隻に接近し、その横腹に鼻面を向ける。

まずは一隻、と、操縦桿から片手を離そうとしたところで、

『おい——マズいやつが来ている』

上空に待機しているチャンから通信が入った。ブラッドの手がぴたりと止まる。

言葉ののち、舌打ちと共にノイズが入ったのは、ブローズグハツダが雲の中にもぐりこんだからだろうか。

一瞬の逡巡の間に、護衛艦はコールガの前から離れていった。ブラッドは追撃を諦め、一旦上昇。状況を確認しようと口を開いたところで、アビゲイルの声が通信越しに飛びこんできた。

『敵機接近！ 超音速機、ディアーブルです！』

同時、レーダーにアラート。縮小されたマップで、新たな反応が目に見える速度で接近し――ブラッドが視線を上に向けた瞬間、雲を突き破って一機の戦闘機が現れた。

コールガの真上を通りすぎる機体に、ブラッドの目は釘づけになる。灰色に塗装された機体は細身。翼の先端が前を向いた特徴的な前進翼を有する戦闘機は、通常飛行時の安定性がない代わりにアクロバット飛行に特化する性質を持つ。

帝国軍が、公国のシリーズ・エーギルに対抗するために作ったハイスpekすぎる戦闘機。ディアールを使いこなせる人間は、いまだ一人しか名が知れ渡っていない。

この瞬間、ブラッドがその姿を視界にとどめることができたのは一秒にも満たない。しかし、目に焼きついたペイントを見つけるにはそれだけで充分だった。

公国を代表する兵器群、シリーズ・エーギルへの挑発が含まれた、パイロットによる自己主張。

「銚に突かれた魚」の図が、ディアールの横腹には描かれていた。

## Code0 : SWORDFISH

——二年前。

また一機、ブラッドの目の前で戦闘機が爆炎に包まれながら眼下の海へと落ちていった。

この戦闘で墜落したのは、全て友軍機だ。爆発、炎上した機体は、黒い海にとけいるようにして沈んでいく。

周囲に明かりはない。ただ、時折瞬くマズル・フラッシュと、帝国軍機特有のブーストエンジンの燐光が空を彩っていた。

五機で編隊を組んでいた友軍機は、自機を含めても三人に減っている。

『こちらソード・ワン！ 帝国機から襲撃を受けている！ 数は一、だが<sup>死神</sup>ラ・モールじゃない！ 援軍が必要だ！』

部隊長の怒声が無線から垂れ流されている。

集中力を乱されるのを感じながらも、ブラッドは通信を開いたままで機体を操っていた。

シリーズ・エーギルにおける最新作、メカジキ型のソードフィッシュは、ある程度の速度を出さなければ飛行が安定しない曲者だ。本来ならば不完全な反重力機能を補助するためにヒレを広げて風を掴み、空を泳ぐようにして飛ぶところを、ソードフィッシュは高速機動時にヒレをたたむ。速度と機動性を重視した、不安定さの目立つ最新機だ。

現在、ブラッドが搭乗しているソードフィッシュはすでに戦闘モードに入っており、飛行に必要なはずのヒレはおりたたまれていた。一定の速度を出し続けなければバランスを崩してそのまま墜落するような、緊張を強いられるフライト。

『何？ 特徴？ 前進翼のイカれた設計ってだけだ！ 夜に色なんざ分か——』  
得られる情報の方が少ないと判断し、ブラッドは通信を切って怒声を遮断。

速度を落とすことなく飛行を続けながら、さきほどまで共に編隊を組んで飛行していた部隊に目を向ける。

残った二機は健闘しているものの、どう見てもこちら側に勝ち目はない。

五対一という数的不利をものともせず、襲撃者はゆうゆうと二機を落としている。編隊を組んでいたのは速度・機動力を重視したソードフィッシュだった

というのに、どちらも背後をとられた「完全な敗北」だ。それでも、ブラッドはいまだ恐ろしさを感じていない。

ただ、驚嘆していた。

美しく飛び、効率的に敵を殺す、自由な機体に。それを操るパイロットに。

——人と飛行機はここまで至れるのか、と。

燐光。マズル・フラッシュが瞬く。二つの爆発。

残っていた最新鋭の機体は、いともたやすく海へ墜とされた。

襲撃者の視線が自らへ向けられているのを、ブラッドは感じる。

他の隊員が周囲を取り囲んでいる間、襲撃者の隙をうかがおうとしていたブラッドだったが、結局彼は一発も撃つことなく最後の一人となってしまった。

全ての動きがシミュレート済みなのではないかと思うくらいに、襲撃者の動きは流麗でよどみない。回避から攻撃、攻撃から回避への転換がはやい。

勝ち目などない。しかもそれは、機体の性能差によるものではない。

そんなことは、ブラッドも理解しているつもりだった。おそらく、襲撃者に挑んで墜ちていった四機のパイロットも同じだろう。

信念、矜持、責任、過信。

彼らを動かしたのは個人の信条か、あるいは戦時における教育の賜物か。ブラッドには知る由もなかったが、彼らを止めることができなかつたのもまた事実だ。

逃げるべきだ。ここで死ぬ必要はない。——そんな言葉が力を持つはずもない。

ここで死んだからといって何になる。——そんな問いが彼らを止められるはずもない。

無線越しに怒声を放っていた部隊長も、飛行中にふざけた会話をかわした同僚も、自分自身の信条のため、公国のため、家族のため、仲間のために死んでいた。

それを止める権利は、ブラッドにない。それだけの決意を見せつけられた。

——それを裏切るわけにはいかない。

ブラッドと襲撃者は、互いに視線を交わしながら円を描くように旋回する。様子をうかがっているのだろうか、それとも戯れに付き合っているだけなのだろうか。先刻まで猛禽のごとくソードフィッシュに襲いかかっていたというのに、襲撃者はブラッドと一定の距離をおいたままだ。

ブラッドが見ている限りでは、こちらの存在が知られている以上、襲撃者か

ら逃れることはできないように思えた。奇襲をかけようとしても、相手の反応速度の方が速い。後ろにまわろうにも、相手の方が一枚も二枚も上手だ。逃げるなどもつてのほかで、射程外まで飛ぶよりも引き金を引く方が速い。

いちかばちかの賭けすら介入の余地がない。

そもそも、「逃げる」という選択肢も、「自滅覚悟の特攻」も、まざまざと見せつけられた部隊員たちの「死に方」に対して、あまりにも失礼なものだとブラッドは思う。

どうあっても生きるべきだ、と。生きて、生き抜くことができなかつたら、せめて自分の信条から逃げない。その結果、死ぬことになったとしても。

「……だつたら」

独り呟いて、ブラッドは操縦桿を握りなおした。

シリーズ・エーギルのみではあるが、様々な機体に乗ってきたブラッドにとって、一本の操縦桿に愛着を持つことは極めてまれだ。愛着を持つよりもはやく機体は変わり、また次の最新機に乗り込むことになる。

ソードフィッシュに乗り始めたのは、つい最近だ。しかし、この機体の操縦桿は、おそらく最期に握る操縦桿であり、最期まで握っている操縦桿だろう。

——操縦桿を握ったまま空で死ぬのなら、それも本望だ。

それが、ブラッドの想いだった。「空を飛びたい」だけの欲求で空軍に入ったブラッドは、初心を忘れぬまま、少年のような想いを抱いて空を飛び続けた。ひたすら自由に、思い通りに飛びまわることを夢見て、今に至っている。地に着けて死ぬよりも、空で操縦桿を握って死にたい——心の底からそう言えるほどに、ブラッドはパイロットという役割を愛していた。

ブラッドはソードフィッシュを加速させた。襲撃者に向かい、全速力で接近する。

とうに射程内には入っている。いつ死んでもおかしくはない。それでも、ブラッドは自殺行為の自覚もなかったし、自暴自棄になったつもりもなかった。

慌てた様子もなく、襲撃者は転回してブラッドの正面へ。

撃つては避けられ、撃たれては避けの攻防が数秒で行われ、二機はすれ違う。

再び襲撃者を視界に入れようと操縦桿を倒したブラッドだったが——そこで異変に気付いた。

反応が悪い。速度が保てない。コックピットに流れるアラートに反応して視線を動かせば、モニタの端には機体の状態が表示されていた。

エラー。機体をかすめるようにして命中した弾丸に揺さぶられ、AIがバラ

ンスを保とうと操縦桿に干渉している。一瞬ではあるものの生じてしまった空白の時間、ソードフィッシュは襲撃者からすればいい的だっただろう。

無防備なソードフィッシュに、襲撃者はどう一度すれ違うよう飛びながら弾丸を浴びせる。コックピットと動力源に命中しなかったのは、幸福といふべきなのだろうか。反重力機能が正常に動作しなくなったソードフィッシュは、他の友軍機と同様に力なく墜落していく。

その最中、ブラッドはノイズの走るモニタの向こう側に目をこらしていた。すれ違おうとしている襲撃者の横腹は、被弾したソードフィッシュの放つ火で照らされ、「銚で貫かれた魚」の絵が浮かびあがっていた。

水棲生物をモデルとしたシリーズ・エーギルの天敵だと、自ら宣言しているかのようなペイントを目に焼きつけて——ブラッドはなすすべなく、ソードフィッシュとともに海へ墜ちた。

——一時間後、奇跡的に大きな損害を受けなかったソードフィッシュは、海に浮遊しているとところを公国軍に回収された。

パイロットのブラッド・ベイリーは重傷を負いながらも生還。死の淵に触れ、魔力を持ち帰ってきた貴重な空軍パイロットとして、『波の乙女計画』に関わることになる。

そして二年後の現在——

## Code4 : PECHEUR

「ペッシヤール……！」

旋回してこちらに向き直るディアアブルを睨みつけながら、ブラッドは絞出すようにその名を呼んだ。

帝国の言葉で「漁師」の意味を持つペッシヤールは、公国内でも名の知られた優秀なパイロットだ。超音速で戦場に飛来し、前進翼が可能にするアクロバットにて敵を翻弄する。ラ・モールのような量産性と汎用性を捨て、シリーズ・エーグルを克服するためだけに生まれた精鋭の機体とパイロット。

「銚に貫かれた魚」のペイントが、一つの機体に施されているとは限らない。ただ、いまのところ公国が脅威と感じているディアアブル乗りは魚のペイントを施しており、同時に二機以上を確認したことはない。

『通達します。ペッシヤールと思われる機体を確認しました。作戦遂行状況に関わらず、生還を第一として行動してください』

アビゲイルから再度、通信が入る。

「撤退しろってか……！」

『できなければ活路はありません。幸運と奇跡は二度も重ならないんです。拾った命を無駄にするつもりですか？』

その問いに答える余裕はない。

方向を変えたディアアブルはコールガに向かって直進している。その胴体にマズル・フラッシュを確認する前に、ブラッドは操縦桿を倒して回避。パーツの隙間を機銃の弾丸が通りすぎる。

背を向けあったのち、互いに鋭く旋回。ブラッドは左手をシート脇のレバーに伸ばし、コールガに魔力を叩き込む。

発動条件 COMPLETE

コード・マジックを発動

これより殲滅を開始します

発動直前で待機状態に入っていたコード・マジックが発動。ヒレは赤く発光し

て瞬時に魔法陣を形作り、現れた炎弾がペッサールに襲いかかる。

コールガのコンセプトは不可避の弾幕。本来ならば一対多の状況で叩き込むべきものを、一機に集中して撃つ。

回避の余地はない——と思われたが、ペッサールは一撃目をひらりとかわし、その先に向かっていった二撃目を回避。機体をひねり、回し、降下と上昇を即座に切り替え、速度を保ったままコールガの弾幕をくぐりぬける。

恐怖心を廃し、隙間ともいえないわずかな空白に機体をねじこむ、その度胸と素質。

「——っ！」

無傷のペッサールを前に、ブラッドは弾かれたように操縦桿を倒した。がむしやらの回避。その意識にプライドが入り込む余地などない。体が震える。寒気が走る。目を疑う。

思考する。

ペッサールは幸運だったのか？ ——否。ブラッドの運が悪かったのか？

——否。コールガのAIに異常が？ ——否。

奇跡ではない。奇蹟だ。ペッサールの技量とディアーブルの運動能力の相性は抜群。故にたやすくヒトの限界を超える。不可避の弾幕に対し、必然の回避をやつてのける神のような領域へ至らせる。

ありえない、と否定することなどできない。文字通り目前で実行された曲芸飛行を、ブラッドの脳はしっかりと記憶している。

思考する。

ドッグ・ファイトを得意としないコールガが、その切り札をもつても墜とせないペッサールに勝てるのだろうか？

『——おい、腑抜けるなヨ』

鼓膜を叩いた声に、ブラッドの意識が現実に戻ってくる。

前方にペッサールはいない。慌てて背後のモニタを見ると、その鼻先はすでにコールガに向けられていた。回避は寸前で間に合ったものの、弾丸の一発がコールガをかすめていく。

かすり傷。されど被弾。

コード・マジックが発動できない、とまではいかないが、エラーが発生する可能性は跳ね上がる。そして、エラーに対応する時間は、ペッサールとの戦いの内に確保できるものではない。

無線からは、チャンの声が続けて届けられている。

『負けるつもりか？ 逃げるつもりか？ 勝手にしろ。ただし邪魔はするナ。俺にはブち壊さなきゃならぬイものがある。……ブち壊すべきものがある』

入れ替わるようにして、ノーネーム。

『撤退は可能。デアアールはシリーズ・エーギル同様に、パイロットが受け取る視覚情報をモニタに依存している。システムに介入すればモニタに映らないようにすることもできる——もちろん、時間はかかるが』

アビゲイルが畳みかける。

『全員、命と機体の安全を最優先にして行動するようにとの通達です。賢明な判断を、お願いします』

目が覚める。見極める。思考する。

ブラッド・ベイリーがペッサールに抱いていた感情は、はたして恐怖だけだったか。

勝てない。コールガに乗る前も、その感情は抱いたことがある。生き延びることなどできない、と理解したうえで、いとわずにペッサールへ挑んだのは、苦しむことなく早急に死にたいと思ったからなのか。

——否。

ペッサールは自由だと思った。「空を飛ぶ」という行為は、これほどまでに自由にできるものなのかと視界が開けたような気さえた。

重力に逆らうことが、その答えじゃない。

コールガに乗ることが、その答えじゃない。

それは単なる手段に過ぎない。

「……わかった」

ペッサールと背後をとりあう戦闘機動を続けながら、ブラッドは言う。

「コールガと同調してペッサールを抑える。その間にチャンは任務を遂行してくれ」

『何を……！』

「アビゲイル。俺は守られるために生き延びたわけじゃない。自由に飛べないなら計画を降りるし、その結果、口封じだから殺されても構わない。そんなことも思い出せなくなっちゃったくらいにビビってたつてのは認めるが……ビビったまま殺される気は微塵もない」

失いかけていた闘争心が煽られる。

数分前の自分と、二年前の自分に。ぐるぐると尻尾を追いあうペッサールに。

『……陽動を、続ける。ペッシャールの脅威が残ったまま、撤退するわけにはいかない』

『準備はできてい。好きなときにブちかませ』

ノーネームとチャンの返答が、ブラッドの背を押す。

数秒の沈黙ののち、アビゲイルは小さくため息をはいた。

『可能な限りのサポートをします。——幸運を』

——賛同は得られた。

もう、逃げることは許されない。逃げるという発想に至れるほど、煽られた闘争心の炎はおとなくはかない。

極度の緊張にさらされたせい、ブラッドの口元には自然と笑みが浮かんでいた。抑えることもできずに、口はひきつった弧をえがく。

落ち着け、と自らを律することもなく、ブラッドはコマンドを叩きこむ。

「コールガ、同調しろ」

コマンドを確認――

全権限を放棄――

補助モードに移行――

これより、リンク・モードに移行します――

電子音声の直後、強烈な閃光がブラッドの視界を襲った。

しかしそれも一瞬。大量の情報が脳に直接叩き込まれたため、急増した視覚情報を処理しきれずに視界がホワイトアウトしただけで、すぐさまコールガのフォローが入る。

視界は明瞭。コールガに搭載されたカメラから見る景色は、モニタ越しに敵を狙うことに慣れてしまったブラッドにとっては新鮮なものだった。

風の流れがわかる。湿度がわかる。分離したコールガのパーツの位置がわかる。次に行う行動の結果も、その影響も、その先に相手がどのような行動をとってくるのかも。

操縦桿を握る必要などない。頭で命じれば、コールガの本体も、ヒレをかたどるパーツのひとつひとつも自在に動く。

——ペッシャールを追える。

ただ、ブラッドはAIと同調するための調整を施されているわけではない。魔力を消費して意識をAIにねじこんでいるだけで、肉体的にも精神的にも疲労が激しいというリスクを負っている。おおよそ、実用化に耐えるような技術ではない。長時間の使用ももちろんできない。

しかし、それでもしなければペッサールを超えられないのもまた事実。

短期決戦。ブラッドに残されているのは、この道だけだ。

コールガを操り、加速。本体とヒレの間に生じるラグを可能な限り縮め、イワシの群体のように攻撃をかくぐる。ペッサールの背後を狙う。

相手には、コールガの友軍機——ブローズグハッダとドゥーヴァの姿は見えていない。ブローズグハッダは雲の中に潜み、ドゥーヴァは完全なるステルス能力で戦艦の目すら欺く。苛烈さを増すドッグ・ファイトに、海上のレヴィアタンと護衛艦は介入する隙間もない。

実質的な一対一。

ブラッドは、その結末をAIの力を借りて予測する。ペッサールの一手先を、二手先を読む。今までの行動から動きのクセを探し出す。そして——

戦力を確認。さきほどの被弾がコード・マジックにどれだけの影響を与えているのかシミュレートする。

七八パーセント。それが、AIがはじきだした、今のコールガが撃てるコード・マジックの威力だった。

普通の機体とパイロットを相手にしている場合は、それでも十分な数値である。しかし、一〇〇パーセントのコード・マジックすら回避したペッサールを相手に二二パーセントの損失は大きい。

最低でもペッサールを抑えこみ、可能であれば墜とすことが望ましい今の状況を考えると、三〇パーセントのパワーブーストを行わなければならない。あるいはコードの変更を実行し、ペッサールに対応したコード・マジックを作り出さなければ。

——思考しろ。

AIと同調したブラッドの意識は、ペッサールとの戦闘と戦闘シミュレーションを同時並行的に処理し続ける。ペッサールの裏を突くコード・マジックを創りだす。

「……コード・マジック変更。新方式にて魔法陣を組み直せ」

口頭でコマンド。魔法陣の構築プログラムを起動し、同調した脳からイメージを送信する。

コマンドを確認――

イメージを受理しました――

システムを構築中\*\*\*\*\* 完了――

コンセプト・不可避の弾幕に基づき、コード・マジックを改変します――

電子音声が告げた直後、ブラッドの意識の片隅でAIによる試行と修正の繰り返しが報告される。

シミュレーション、エラー。

再シミュレーション、エラー。

再々シミュレーション、エラー。

本来ならば専門の知識を持つ人間が行うべきところを、AIはその単純作業への耐性をもって克服する。秒単位で更新される新しいコード・マジックから意識を反らし、ブラッドはペッサールとのドッグ・ファイトに集中。

両者の戦いは、「二発も撃たない空中戦」へと様相を変えていた。共に敵の射線に入らず、自分の射線上に敵を入れようと動いているのだからそれも当然のことで、特にブラッドがコールガと同調してからはその動きが鋭くなっている。

射線上に敵がないのに、機銃を撃つことに意味はない。牽制が有効な相手ではなく、そもそも一発の射撃で生じる反動すら、今の状況では命取りになる。

進行方向とは逆に向かうエネルギーを生み出すことになる――つまりは減速の原因。

一瞬ではあるが、致命的な隙を生み出しかねない危険な行為だ。

だから、ブラッドはAIの仕事を待ち、ペッサールの隙を伺い続ける。

打ち込む一撃のために、相手の精神を削り続ける。

最適な位置をとるために、コールガの細部にまで意識を裂く。

意識の片隅で経過を報告し続けるAIの言葉は、定型文を読み上げるような繰り返しに終始していたのだが――

シミュレーション完了――

エラー修正完了――

適応しています\*\*\*完了—

エラー—

原因となるパーツを特定—

必要エネルギーを七八パーセントに減少しました—

コード・マジック セカンドの発動シークエンスが完了しました—

エネルギーのチャージを行ってください—

電子音声の言葉を聞き、ブラッドは冷静に状況を把握する。

AIとの同調を強化。数手先を読み、思い通りの状況を作り出すべく行動を開始する。

旋回と同時に上昇。短い距離で方向を転換し鋭く接近すると、ペッサールは背後をとられないよう加速と旋回を同時に行う。

ディアブルの優秀な加速力で開かれた距離をもつて、ブラッドはコールガをペッサールに向ける。同調に魔力を裂きつつ、さらに左手でコールガに魔力を流した。

発動条件 COMPLETE—

コード・マジック セカンドを発動—

これより殲滅を開始します—

コールガのパーツが鮮やかな橙色に発光する、魔法陣が展開。コード・マジック セカンドと名付けられた対ペッサール用のコード・マジックは、通常のとそれと展開される陣が違う。

構成するパーツは同じ。だが、位置と角度の微調節によって、その魔法陣はまた違う意味になる。

魔法陣の前に現れる火球は、被弾の影響もあっていつもより少ない。ペッサールはひるむことなくまっすぐにこちらへ向かってくる。一度ぐりぬけたことよって自信がついたのか—あるいは慢心となってしまったのか。

ブラッドは息を吐いて止め、引き金を引く。

大量の火球が空を焼いた。着弾の直前でペッサールは機体を傾け、火球の間に生じた空白をぬうように飛ぶ。ブラッドとコールのA.I.によって計算されつくしたルートを。

「第二波、待機」

コマンドと共に、ブラッドの視線がペッサールから反らされる。

ペッサールを押し込めた——ということは、なにも問題が起こっていないければチャンが動く。レヴィアタンに攻撃をしかけるために。

高速処理を行う脳は、時間を引き延ばしたようにたくさんの情報を仕入れてくる。雲を突き破って躍りでるブローズグハツダを捉え、それから数秒後に海上の戦艦から放たれた対空ミサイルの軌道すら読みきる。

ノーネームの遊撃の影響で、レヴィアタンと護衛艦に残された兵装は少ない。ペッサールもコールガに抑えられ、ブローズグハツダの行く手を遮るものは最小限にとどめられている。

しぼんだ状態のまま、ハリセンボン型の機体は火力特化の性質を思わせない身軽さでミサイルをかわしていく。まっすぐにレヴィアタンに突撃するような軌道。速度は全く落ちない。

——おかしい。

秒単位の場面の中で、ブラッドは疑問を抱く。

ブローズグハツダはいまだに撃っていない。

火力特価である場合、強大なエネルギーを撃ちだすために機体を安定させる必要がある。敵から発見されない場所で狙撃体勢をとり、誰にも悟られないまま撃ちこむのがもっとも効率的なのだ——遠距離から高火力を発揮できる場合は。

もどかしい、とブラッドは歯を食いしばる。脳の処理速度に体が追いつかない影響で、チャンを止める言葉すら発することができない。

ただ、制止したとしても止まることなどしないだろうということ、うっすらと理解していた。

ブラッドは思い出す。

二年前、襲撃者ペッサールに挑み、負け、死んでいったソードフィッシュのパイロットたちを。

ヒミングレーヴァの司令室で見た、チャンの破壊衝動をにじませる狂氣的な言動と、火事か爆発にまきこまれてできたような火傷痕を。

モン・チャンは止まらない。ブローズグハツダは止まらない。

突撃の勢いそのまま、ブローズグハツダはレヴィアタンに激突——その寸前に、体を大きく膨らませた。ハリセンボンの威嚇姿勢。丸く膨らみ、棘を立て、直後に爆発。

コールガのコード・マジックなどとは比べ物にならないほどの巨大な炎が、海の上に生じた。巨大な戦艦レヴィアタンを呑みこみ、爆風で飛来した棘が護衛艦に突き刺さる。海面には、クレーターのようになり白波が立った。

息をのむ。思考が止まる。いつそ美しく見えてくる爆発とその余波に、目を奪われて反らせない。

ブローズグハツダの名の意味は「血まみれの髪」。

そのコンセプトは——

『絶対帰還の特別攻撃』

ノイズ一つない通信が入った。独特のイントネーションが残る、素っ気ない口調だった。

同時、爆炎の中から、しぼんだ状態からさらにひとまわり小さくなったブローズグハツダが姿を現す。完全な二層構造を持つブローズグハツダは、機体前方の魔力増幅装置にて最大火力を実現し、その中から抜け出すことのできる小さな機体を魔力の盾によって保護している。

自爆。しかし、パイロット自身には傷一つつかない。機体の外装を使い捨てて実現する、ハイリスクハイリターンな一撃必殺。

『腑抜けるなど行っただはズダ。お前はお前の仕事を果たせ』

「——っ、おま、え」

ブラッドは、干からびた喉から言葉を絞り出す。

そこに、口を挟むようにして電子音声が届く。

警告——

同調を強めてください——

ブラッドが弾かれたように反応。自らの頭とコールガのAIに魔力を集中させ、意識をペッシャールに戻す。

同調が弱まっていたせいか——実際には同じ速度で接近しているのだが——

両者の距離は一気に縮まっていた。第一波の隙間をぬい、迫りくるペッサールにブラッドは第二波で応じる。

ペッサールの回避ルートは、ブラッドの想定通りだった。いくつかのパターンは用意していたもの、おおむね同じ方法で、ペッサールはコールガのコード・マジックを潜り抜けてきた。

火球と火球の間に生じるタイムラグ、どうしてもできてしまう隙間——そして、長く尾を引くように調節された弾幕が、ペッサールを捕える網になる。

もはや、ペッサールは直進するしかない。そして、潜り抜けられる前提で待ち構えていたコールガには、迎撃の準備ができている。

第二波、射出。

捕らわれたペッサールを射るように、一発限りの第二波が弾幕の尾に囲まれた中を突き進む。

ペッサールは、機銃を撃つことすらできなかった。

畏にかかった。そう理解するのに時間がかかったのかもしれない。

どれだけ目をこらしても、AIと同調して処理速度を上げても、敵パイロットの表情をうかがうことはできない。恨み言を聞くこともない。

ただ——火球を浴びて墜ちる「かつての強敵」の姿を、ブラッドは見送ることしかできなかった。

そのときに感じた悲しみを、ブラッドは自分で理解できないまま抱え続けることになる。

## Code5 : JOKER

「……さて、私は確かに君たちに『ジョーカーであることを示せ』と言いはしたが」

静かな声音が司令室に響く。

部屋の主であるクレイグは、二人のパイロットを前に細く息をはいた。

一人はブラッド・ベイリー。コールガパイロット。

作戦中、A Iとの同調<sup>リンク</sup>を行い、シリーズ・エーギルにとつての脅威だったペツシャルを墜とした。

一人はモン・チャン。ブローズグハツダパイロット。

その機体特性である高火力を存分に発揮し、帝国の元・ジョーカーであるレヴィアタンと護衛艦を一撃のもとに破壊した。

——という功績だけを見れば賞賛に値するどころの話ではないのだが、今回は少々無茶がすぎた。

「命の賭け方、というものを、君たちは知っているだろう。死にかけてと同時に他人の死をも目の当たりにした君たちに命の尊さなど説く必要はあるまい。他人である私の思想を押しつける気もないし、そうしたところでさして意味がないことは理解している。そのうえで言わせてもらおう。……君たちは自分の命をもう少し大切にすべきだ」

微笑したクレイグは、いつもより幾分柔らかくなった視線を二人のテスト・パイロットにおくる。頬をかくブラッドに対し、濁った瞳を虚空へ向けているチャンには届いていないようにも見えるが、火傷に覆われた顔の右側で一瞬ではあるが筋肉が引きつっていた。

意味が通じていないということはない。

『波の乙女計画』に属するパイロットであれば一度は死にかけてきたことのあるものばかりだし、同時に他人の死を目撃しているものも多い。それに伴って、命に対する思考と考察には個人的に時間をかけているものがほとんどなはずなのだ。

いつだれがどこで死ぬのか。そんなことは分からない。だからこそ、その場でできることをした——と言われれば返す言葉もないのだが、まさか空中格闘戦に特化したペツシャルを相手にして、火力特化二機・隠密特化一機の組み合わせで応戦するとは。

と、クレイグが思考しているところで、司令室の扉が開いた。

ほとんどタイムラグを挟まずに投げ込まれたのは、濃い茶髪の青年だった。

ちょうどブラッドとチャンの間に「べちゃり」と着地した闖入者（強制）が一斉に注目をあびる。気弱そうなたれ目と筋肉がほとんどないように見える細身の体に、空色の軍服が全く似合っていない。

「失礼します……失礼しました！ 相変わらず迷っていたので配達させていだきましたので私はこれにて退散します。管理が至らず申し訳ありませんでしたっ」

青年を投げ込んだと思しき人物の声は、女のものだった。たたみかけるような早口でも聞きとりやすい。

呆気にとられるブラッドとチャンを置き去りに、クレイグと「運び屋」が言葉を交わす。

「……いつもご苦労」

「ありがとうございます。失礼します」

いつも？ と首をかしげるブラッドがどうするべきか迷っていると、物のような扱いを受けていた青年が慌てた様子で立ちあがった。

そして、名乗る。

「お、おきゅ……遅れて申し訳ありませんでした！ ドゥーヴァパイロット、ノーネームでしっ！ ……スミマセン……」

声がしぼむと同時に縮こまるような姿勢になる闖入者（強制）改めノーネーム。

唐突かつ予想外なファーストコンタクトに理解が追いつかない。言葉のひとつひとつをかみ砕き、さらに作戦中のやりとりを思い出そうとするブラッドだったが、ノーネームを名乗る二者に共通点は――

「……嘘、なんだろ？」

「本当ですスミマセン」

――ない。

よくよく思い出してみれば声は似ている。のだが、硬く平坦な口調のノーネーム（パイロット）と、囁んでは謝るノーネーム（闖入者）では他者に与える印象に違いがあまりすぎる。同一人物であるとすれば、闖入者のノーネームが本質であり、パイロットとしてのノーネームは「過度の緊張の表れ」だと理由づけできないこともないのだが、それにしてもかなり大胆な言動をしていたようにも思えてくる。

「だってお前……ペツシャルから逃げられるとかすごい自信ありげに……」

「に……逃げたかった、んです、スミマセン」

「なぜ謝ル」

「スミマセ……ひいつ」

チャンを見たノーネームが——おそらくは火傷痕に驚いて——情けない悲鳴をあげた。

直後、自分のしたことに気づいて謝罪を連発するのだが、逆効果。チャンは嫌そうな顔でノーネームを見下ろして、しばらくしてからブラッドに視線を向ける。

「おい、どうにかしろ」

「……残念だが、俺にはなにもできない」

「分かった、女と親しげだったことも含めて爆破すル」

「よく分からない私怨みたいなのが含まれてるなあオイ！」

「ばっ、爆破はヤメテ！ ヤメテください！ スミマセン!!」

条件反射のように謝罪を繰り返すノーネーム。おおよそ司令室でかわされるような会話ではないのだが、彼らがそれを察する気配はない。

結果的に、三人の直属上司であり、部屋の主でもあるクレイグはその会話を見守ることになるのだが、パイロットたちの性質を知れば知るほどそれぞれの機体との相性がいいということを思い知らされる。

ノーネームと「完全なる隠密」ドゥーヴァ。

モン・チャンと「絶対帰還の特別攻撃」ブローズグハッダ。

ブラッド・ベイリーと「不可避の弾幕」コールガ。

特に、ブラッドとコールガの相性はクレイグも目をみはるものがある。適合するものがないとして、封印されることとなったコールガ本来のコンセプトすらも易々と受け入れてしまえそうだ。

「——そろそろ、こちらの話に移っても？」

クレイグの言葉に、三人が反応する。ブラッドは軍人らしく姿勢を正し、チャンは心なしか安心した様子で、ノーネームは肩を跳ね上げてから縮こまる。

三者三様。互いにかかわることなどなかったであろう人間がここに集っているのは、「死にかけたものの、生き延びることができた」という、幸運なのか不運なのか判断に困る共通点があったからこそだ。

それでもなお命のやりとりを行い、帝国を敵にまわして、試作機の域を出ない機体に乗る込むのだから、それなりの考えはあるのだろう。命の尊さだの、

命を賭けるべきときだの、そんな言葉は本当の意味でなんの力も持たない。

ゆえに、クレイグは命じる。

不安定な試作機にこれからも乗り続けろ、と。

「旧ジョーカーであるレヴィアタン、そしてジョーカーになりえたペツシャーを失った帝国に、しばらくの間は脅威を感じないだろう。問題は、帝国の支配圏と国民の数が大きすぎることにある。脅威となるものはすぐに生まれ、油断のできない状況はすぐに訪れることになる」

切り札を倒しても、戦争に勝利するわけではない。

相手が負けを認めるまで——あるいは、認めざるを得ない状況に陥らせるまで、戦争は続く。その前に平和協定が結ばれることはごくまれで、大きすぎる力を持つている帝国が「決着をつける前に和平を結ぶ」ことはそれだけで矜持と威厳を傷つける行為となる。

故に、帝国は決して退かない。

退いた瞬間、今まで帝国の軍事力に怯えていた被支配国たちが、一斉に反乱を起すことだって考えられるのだから。

「君たちは、名実ともに公国のジョーカーとなった。その地位を守り続けてくれ。——次の標的はファントム。帝国唯一の、潜水航空母艦だ」

〈了〉